
朝鮮語の変則用言

佐野三枝子

1. はじめに

朝鮮語Iの授業では、前期に文字と発音を学び、指定詞、存在詞、動詞、形容詞の文末の丁寧表現及びその尊敬形を学ぶ。後期になるとこれらを基にして八種類の変則活用を学んで、基礎になる文法事項の学習を終える。毎年、数人ではあるが、学生が音の変化や変則になる理由などを疑問に思って問い合わせてくる。その際には、簡単にではあるが、表記法、古語や消失文字、語の成り立ちなど、言語の歴史に関する事柄に触れて説明してきた。表記や音韻変化、文法、語彙の変遷過程などを踏まえたうえで解説することが、わずかであっても学生の理解を助け、言語自体に関心を持たせることにもなると考えるからである。そして、そうすることが朝鮮語を正確に伝うことになるとを考え、授業では一言でもそれらに言及するよう心掛けてきた。

変則活用を説明するには、形式だけではなく、綴字法や言語史を明らかにし、理解しておくことが大事である。そこで、本稿では、変則活用について成された研究の中から幾つか選び、どのように解説しているか簡潔に整理し紹介したうえで、母音変則活用で「ヨ」が「ヰ、ヰ」の両方に変わる理由と、母音変則活用で第二音節が「- ハ」に変わることの理由を考察し、その説明を試みる。

2. 変則用言の解説の検討

朝鮮語概説書と文法書、綴字法に関する書、高等学校古典参考書、国語辞典及び古語辞典を用い、変則用言とそれに関わる文字の、音韻変化に関する解説、活用方法に関する解説の順に示す。用例の表記方法や例示の仕方、用語や記号、番号などはそれぞれの方式に従う。

2.1. 金亨奎(1983)『増補国語学概論』

第二章 音韻論 第4節 音の連結と変化

音の脱落 二形態が結合する時、基本形態の音素が脱落（省略）することがある。

(2)前の形態素の末母音が/ヰ/で、次の形態素の初めの母音が/ヰ/である時は、前の/ヰ/母音が脱落する¹⁾。

/ヰ - / (浮) + / - 어서 / → / 떠서 /, /ヰ - / + / - 어라 / → / 떠라 /

/ヰ - / (大) + / - 어도 / → / 커도 /, /ヰ - / + / - 었다 / → / 커다 /

(3)末音に/ヰ/ [1]を持つ形態素が別の形態素との結合で/ヰ/音を脱落させることが多い。

/울다/ (泣)、/울고/ ~ /우고/ (울으오)、/우니/ (울으니)

/놀다/ (遊)、/놀고/~/논다/ (놀는다)、/노지/ (놀지)

第二章 音韻論 第5節 音の同化作用

母音間にある子音の弱化脱落 母音間で音響度が小さい/ㄱ、/ㅂ、/ㄷ、/ㅅ/音は弱化脱落する現象がある。これは前後にある音響度が大きい母音に影響を受け、音響度が大きい音に変わる現象であるが、同化作用の一つに該当する。

ㅂ变則用言 돕다、돕고、돕지 : 돋으니 > 도우니、돕아 > 도와
굽다、굽고、굽지 : 굽으니 > 고우니、굽아 > 고와

即ち、形態素/돕/ (助) は子音/ㄱ、/ㄷ、/ㅅ/の前では原形をそのまま保っているが、母音からなる助詞/-야、-으니/との連結では/ㅂ/音が [u, w] に変わっている。

ㄷ变則用言 듣다、듣고、듣지 : 듣으니 > 들으니、듣어 > 들어
묻다、묻고、묻지 : 묻으니 > 물으니、묻어 > 물어

即ち、形態素/듣/ (聽) は子音の前では原形をそのまま保存しているが、母音からなる助詞/-야、-으니/との連結では、/ㄷ/音が同じ位置で発音されるが音響度が広い/ㄹ/音に変わったのである。

ㅅ变則用言 짓다、짓고、짓지 : 짓어 > 지어、짓으니 > 지으니
낫다、낫고、낫지 : 낫아 > 나아、낫으니 > 나으니

ここでも前例と同様のことが言えるが、母音間で/ㅅ/ [s] 音が脱落したのである。

ㅎ变則用言 하얗다、하얗고、하얗지 : 하얗으니 > 하야니、하야
까맣다、까맣고、까맣지 : 까맣으니 > 까마니、까마

ここでも前例と同様のことが言えるが、母音間で/ㅎ/音が脱落したのである。実は/ㅎ/音は/季으니/、/많으면/のような言葉でも発音されないことが多い²⁾。-中略- 音韻現象のみならず、音の脱落現象により説明される。即ち、変則用言の大部分が音韻変化現象にその原因があるのである。

2. 2. 李基文 (1998) 『(新訂版) 国語史概説』

第七章 後期中世国語 第5節 音韻 1. 子音体系

‘ㅇ’ の消失はまず ‘△ㅇ’ で起こった。-中略- ‘ㄹㅇ’ は ‘몰애’ (砂)、‘놀애’ (歌) 等の名詞においては16世紀末まで変わることがなかったが、用言活用においては ‘ㄹㄹ’ に変わった例が見られる。即ち、16世紀末の小学諺解に ‘올라’ (登)、‘올려든’ (上)、‘널럼즉디’ (謂)、‘달름’ (異) 等の例が現われることは注目に値する。これらは15世紀では ‘올아’、‘달음’ 等と見えていたものである。-中略- 後期中世語で子音が連接されるとの規則の中で重要なものを挙げると次のとおりである。(2) ‘△’、‘ㅌ’ は ‘ㄱㄷㅅㅅ’ 等と連接されると ‘ㅅ’、‘ㅂ’ になった。‘ㅎ-’ (笑)、‘ㅎ-’ (助) 等に ‘-고’ が連接されると ‘웃고’、‘돕고’ になった。

第七章 後期中世国語 第5節 音韻 2. 母音体系³⁾

後期中世国語に母音が連接されると次のようにになる規則があった。ㅏ -ㅏ >ㅏ、ㅓ -ㅓ >ㅓ、ㅓ -ㅏ >ㅏ、ㅓ -ㅓ >ㅓ、ㅓ -ㅓ >ㅓ、ㅓ -ㅓ >ㅓ、ㅓ -ㅓ >ㅓ 等。たとえば、動詞語幹 ‘가-’ (行) に語尾 ‘-아’ が付くと ‘가-’ になり、‘污-’ (掘)、‘𠂊-’ (用) に ‘-오/우-’、‘-아/어-’ が付くと ‘至-、尋’、‘卑-、呻’ になった⁴⁾。-以下省略-

第七章 後期中世国語 第六節 文法3. 活用

中世語の活用語幹には自動的交替を見せるものと非自動的交替を見せるものがある。－中略－中世語には末音 ‘△’、‘ঁ’を持った多くの語幹が存在した。

例：**나-**（進）、**나-**（繼）、**나-**（愛）、**나-**（注）、**알-**（奪）、**웃-**（笑）、**웃-**（稽）、**웃-**（拾）、**작-**（作）、**작-**（麗）、**작-**（炙）、**작-**（臥）、**작-**（暑）、**작-**（易）、**어풀-**（暗）、**어풀-**（難）、**임-**（迷）、**침-**（寒）、**침-**（並）、**침-**（白）、**침-**（薄）等。これらの末音は子音で始まる語尾の前では自動的に ‘ㅅ’ と ‘ㅁ’ に交替した。－中略－

用言語幹の非自動的交替には現代語でも見ることのできる ‘듣- / 들-’（聞）‘문/물-’（問）のようなものの他にも次のようなものがある。－中略－ (2) ‘다르-’（異）の活用形は ‘다르거늘、다르샤、달아、달옴’ 等であった⁵⁾。この語幹は ‘다르-’ と ‘달o-’ に交替した。これと同一の交替を見せるものとしては ‘고르-’（均）、‘기르-’（養）、‘너르-’（謂）、‘두르-’（圍）、‘으르-’（裁）、‘오르-’（上）等がある。(3) ‘모르-’（不知）の活用形は ‘모르거늘、모르고、몰라、몰롤’ 等であった。このような交替を見せるものとしては ‘으르-’（乾）、‘으르-’（退）、‘으르-’（速）、‘부르-’（呼）、‘흐르-’（流）があった。(4) ‘으△-’（碎）の活用形は ‘으수디、으수며、분아、분온’ 等であった。即ち、‘으△-’ と ‘분o-’ の交替を見せた。このような交替を見せたものとしては ‘그△-’（牽）、‘비△-’（扮）、‘수△-’（喧）等があった。－中略－ これらの交替は16世紀後半に(2)が(3)に合流して近代語に引き継がれ、(4)はなくなってしまった。

2.3. 李崇寧 (1981) 『改訂増補版 中世国語文法』

第1篇 音韻論 第2章 子音論

[15] －前略－ ‘ঁ’ 音の変化は次のような公式で説明されるであろう。

$$\begin{array}{ll} \text{哿} : \text{ঁ} + \text{ㅏ} > \text{W} + \text{ㅏ} = \text{와} & \text{ঁ} : \text{ঁ} + \text{ㅡ} > \text{W} + \text{ㅡ} = \text{উ} \\ \text{哥} : \text{ঁ} + \text{ㅓ} > \text{W} + \text{ㅓ} = \text{워} & \text{ঁ} : \text{ঁ} + \cdot > \text{W} + \cdot = \text{ও} \end{array} \left. \begin{array}{l} \text{哥} \\ \text{哥} \end{array} \right\} \text{圓脣母音化}$$

ここで ‘ㅁ > ঁ > W’ の公式が出てくる。

[17] 活用では語幹末音の ‘ㅁ’ 音が ‘ㅁ > ঁ > W’ または脱落するため変格になるものがある。

$$\begin{array}{ll} \text{덥다} > \text{돕다} & \text{더분니} > \text{더우니} \\ \text{덥고} > \text{덥고} & \text{더분며} > \text{더우며} \\ & \text{더번} > \text{더위} \end{array} \left. \begin{array}{l} \text{語幹: təp-} \\ \text{語幹: təβ-} \end{array} \right\}$$

[39] ‘△’ 音は語幹末音では存在することができない。 ク다（割）、깃다（茂盛）

このように ‘ㅅ’ で現われるが、曲用や活用において母音語尾が來るとその音 ‘ㅅ’ が ‘△’ 音になる。 マ시라、그녀、기녀

それで次のような活用で変格活用が生じるのである。

$$\begin{array}{ll} \text{깃다 (作)} > \text{깃다} & \text{지스니} > \text{지으니} \\ \text{깃고} > \text{깃고} & \text{지스며} > \text{지으며} \\ \text{깃디} > \text{깃디} & \text{지씨} > \text{지어} \end{array} \left. \begin{array}{l} \text{語幹: cis-} \\ \text{語幹: ciz-} \end{array} \right\}$$

第1篇 音韻論 第4章 音韻変化

[93] 15世紀以前から夙に、有声子音と連結されたり、または、母音間に介在する子音の発音が弱化

していったことが推測される。それは、まず、次のような全ての類型の語形で生じたのであると考える。

- 曰 ->- 𠂊 ->- W- (A) - 入 ->- 𠂊 -> 脱落 (B) (C) 以下省略 (該当せず)

[96] 15世紀以前から15世紀にかけて異化作用 (dissimilation) が起こったことがある。それは ‘ㄹ - ㄹ > ㄹ - ㅇ’ のような語幹末音の ‘ㄹ’ を脱落させる現象である。これは同音省略 (Haplology) ということができる。- 中略 - 15世紀に動詞では次のような異化の例の新旧両形が現われる。

니를다 (至) ~니르다、 우를다 (鳴) ~우르다

そして語幹の新旧両形が存在するようになり、曲用がまた変わる。- 中略 - これは動詞でも新語幹だけが残ったが、活用は新旧語幹を基準にすることで分けられる。- 中略 -

니를다 : 니를고, 니를며, 니르려

니르다 : 니르고, 니르며, 니르려

この両形は15世紀の文献に現われているが、‘니르다’の‘니르려’だけは旧語幹の活用を持っており、異化作用で起こった新旧両形の曲用活用の不一致が現われるようになったものである。例示してみると次のとおりである。

例：니를다～니르다 (至)

(a) 梵天에 니르르샤 (月印釈譜十七30) 第五十에 니를면 (同46)

信解 내요매 니르려도 (同31)

(b) 이제 니르드록 (杜詩諺解九6) 梵世예 니르게 旱시고 (釈譜詳節十九38)

十方法仏世界에 다 니르며 (同39)

우를다 (鳴) ~우르다の例は省略。

これが ‘ㄹ - ㄹ > ㄹ - ㅇ’ の異化作用で展開された第二次的事実である。

[107] 音韻変化ではなく、それとは反する、心理的な統一で語形が変わることを ‘類推作用’ と言うが、これを考察することにする。音韻変化は生理的に発音努力を節約する現象である。

견녀 > 견녀 (渡)⁶⁾、 보선 > 보선

これは全て発音を容易にする現象であるが、このように音韻変化だけを自由に経るならば語形が複雑になって ‘記憶努力’ が手に負えなくなる (記 = 記憶努力、 発 = 発音努力)。

덥고, 딥고, 딥고 } 語幹 : təp-

덥다, 딥다, 딥다 } 語幹 : təp-

덥은, 더분, 더운 } 語幹 : təp-> təW-

덥어, 더벙, 더워 } 語幹 : təp-> təW-

(発大)、(発中)、(発小) …… 発音努力が小さくなって行く

(記小)、(記中)、(記大) …… 記憶努力は大きくなって行く

則ち ‘덥고、덥다、덥은、덥어’ では ‘発音努力’ は ‘曰’ の度に脣を閉じるため間違いなく力を要する (発大)。その内 ‘더분, 더벙’ になり、‘𠮩’ で脣は完全に閉じなくてもよいため ‘発音努力’ がずっと減じられるが (発中)、語幹は ‘덥～더𠮩’ に分かれ、記憶努力がもっと大きくなる (記中)。さらに ‘더운, 더워’ で脣を閉じなくてもよいため ‘発音努力’ はいっそう減じられ (発小)、それと反対に語幹が ‘덥’ と ‘더 + 우’ に分かれ、記憶努力は最も大きくなる (記大)。

則ち、語幹が ‘덥～더 + 우’ に分かれることにより記憶の負担が大きくなったのである。いわ

ゆる変格活用がどれだけ記憶が難しいかがわかるのである⁷⁾。

2.4. 崔範勳 (1990) 『韓国語発達史』

第六章 近代韓国語 第4節 文法6) 変則活用

現用文法には全部で12種の変則活用があるが、ここでは動詞・形容詞をまとめて10種の変則に整理することができる。現用語で우、거라を除いた語幹の一部が変形して残ったり、全て脱落したりする場合のニ、己、口、日、へ、ヰ、ヰ/ヰがあり、語尾部分だけに変形が生じるヰ(야)、나라、러があり、語幹と語尾の両方共に変形が生じるヰ/ヰ変則活用ある。変則が生じる音韻環境は、大体、現用語と同じであるが、幾つか部分的な差異があるのみである。

まず、へ、日変則は‘△、ヰ’の中間過程を示している。しかし、웃(笑)、식(洗)、앗(奪)、ヰ(拾) 다と 踏(踏)、 薄(薄) 다は変則から現用語正則に復帰 return した。したがって少なくとも中古語前期以前の時期に遡及すれば正則活用をしていたのであろう。

次に、ニ変則動詞 닫(燥)、전(塩)、다닫(到) 다는 달다、절다、다다르다と共に存している。そして、いわゆる러变則はその基本形を프르(青)、누르(黄)、니르(到) 다としたとき变則であつて、これがそれぞれ프를、누를、니를다であれば語尾 ~어서が來るとき프르러서、누르러서、니르러서になり、単に連音であるのみであり、变則ではない。

2.5. 유두선 (1993) 한샘 古典 特講

第一章 語学的な文章 1. 訓民正音 基本学習 2. 消失文字鳥瞰

ヰ 有声音間に使われる。日不規則は用言に現われる。

変遷 ヰ > 오/우 又は ø 音 + 아→고바 > 고밝 > 고와

△ 有声音間に使われる。へ不規則用言に現われる。

変遷 へ > △ > ø 낫어→니서 > 니식 > 이어

第一章 語学的な文章 1. 訓民正音 御旨 2

文法19 有声音化 ‘日、へ’ が有声音（母音、ㄴ、己、口、ㅇ、ヰ、△）間に挟まれ、有声音 ‘ヰ、△’ に変わる現象。

(1) 日不規則、へ不規則用言で 例: 문 + 아 > 글방、 ဩ + 은 > 열분、 낫어 > 니식

第一章 語学的な文章 1. 訓民正音 声音法・四声点

文法26 己脱落 (1) 実質形態素の末音 ‘-己’ + ‘へ、ニ、ㄴ、立’ で ‘-己’ が脱落する現象。

例: 길듯던지 > 기듯던지、 일느니 > 이느니

(2) ‘己脱落用言’ は現代語とは異なり、 ‘-시’ の前で ‘己’ がそのまま維持されている。

例: 열 + (으) 시 + 니 > 여르시니

文法32 舌側音化 ‘ヰ/ヰ’ で終わる動詞や名詞に母音が連結されるとき ‘· / -’ が脱落して舌側音で発音される。

己、ㅇ形態 ⇒ ‘ㅇ’ は有声摩擦音

己、己形態 ⇒ ‘ヰ’ が生じる。

①다己 + 아→달아 (○)、다라 (×)

①색己 + 아→샐라 (○)、샐아 (×)

②오己 + 이 + 샤→을이샤 (○)、오리샤 (×)

②모己 + 음→몰룸 (○)、몰음 (×)

③니르 + 어→닐어 (○)、니러 (×)

③흐르 + 어→흘러 (○)、흘어 (×)

④비브르 + 옴→비블옴 (○)、비블롬 (×) ④省略

⑤-⑦省略

参考 舌側音化しない形態 - 푸르다, 누르다 [黃], 프르다 等。

2.6. 『금성판 국어대사전』(金星版国語大辞典) (1991)

附録 動詞・形容詞語尾表及び助詞表の動詞語尾表と形容詞語尾表の(D表)の説明の項に、不規則動詞及び不規則形容詞について整理している。ここでは動詞と形容詞が同一の活用をするものはまとめて示し、例は省略する。

ニ不規則 語幹末の ‘ニ’ が語尾の母音の前で ‘ㄹ’ に変わる。動詞九語

리不規則 語幹 ‘어’ が常に ‘-리’ に変わる。動詞一語、形容詞二語

르不規則 語幹末の ‘르’ と語尾 ‘-아 (어)’ が合わさり ‘ㄹ라 (리)’ に変わる。動詞八語、形容詞多数

ㅁ不規則 語幹末の ‘ㅁ’ が語尾の母音の前で ‘오 (우)’ に変わる。動詞、形容詞多数

へ不規則 語幹末の ‘へ’ が語尾の母音の前でなくなる。動詞多数、形容詞一語

여不規則 語幹 ‘아’ が常に ‘-여’ に変わる。- 하다動詞、- 하다形容詞全部

우不規則 語幹末の ‘우’ が語尾 ‘어’ の前でなくなる。動詞一語

ㅎ不規則 語幹末の ‘ㅎ’ が語尾 ‘-ㄴ, -ㄹ, -ㅁ, -ㅂ’ や母音の前でなくなる。形容詞多数

[ㄹ不規則] 語幹末の ‘ㄹ’ が ‘ㄴ, 을, 오, ㅁ, ㅂ’ の前でなくなる。語幹末が ‘ㄹ’ 終声である動詞と形容詞全部。

[ㅗ不規則] 語幹末の ‘-’ が語尾 ‘-아 (어)’ の前でなくなる。動詞九語、形容詞多数

[ㄴ] 語尾 ‘-ㄴ다→다’ に変わり、‘-ㄴ (은)’ が付かない。動詞一語

語尾 ‘-은→는, -으오→-오, -으이→네’ に変わる。形容詞二語

略語 ‘여’ ‘-ㅓ + 여 = ㅕ’ に縮約する。- 하다動詞と - 하다形容詞全部。

徐廷洙 (1996) 『国語文法』と『우리말 큰사전』(韓国語大辞典) の解説方法及び内容も『금성판 국어대사전』と大きな違いがないので、ここで一括して検討することにする。解説内容全体の提示は省略する。

『금성판 국어대사전』での不規則活用の各解説には活用形も載せているが、内容は附録とほとんど同じである。異なる点は、비음不規則活用と비음不規則活用の解説である。비음不規則活用の解説は、附録では ‘우’ を括弧の中に入れているのに対し、‘어’ や ‘어’ で始まる語尾及び媒介母音を要求する語尾の前で ‘우’ に変わると、‘오’ の場合と同様に説明している。『우리말 큰사전』も同じである。ところで、徐廷洙 (1996) は見解を異にする。母音 (調声母音を含む) で始まる文法形態と結合するときにその末音 “ㅁ” が “우” に変わるものと指すとし、その後に次のように解説を施している。従来の文法書では “ㅁ” が “우” や “오” に変わるとした。用言末の母音が陽性母音 “ㅏ” や “ㅗ” である場合には、母音調和規則に従って “오” を選択し、全て “가까와, 아름다와, 까다로와” 等になるのを原則とした。しかし、現行の한글綴字法⁸⁾ では “돕다” と “춥다” だけが “오” を選択すると限定した。したがって、この二語を例外とすると “ㅁ” が “우” に変わると一般化することができる。

李崇寧・安秉禧(1994) I. ハングル綴字法第4章第2節語幹と語尾第18項6の但し書きに、「昏-、音-」のような单音節語幹に「-아」が結合して「와」と発音するものは「-와」と書くとある。そして、その解説では、語幹が二音節以上である場合には母音調和にかかわらず、常に「우」に変わる。『統一案』⁹⁾では「가까와、수고로왔다」と書くよう規定していたが、『ハングル綴字法』では実際に発音されている「가까워、수고로웠다」を採択し、終声「曰」が「오」に変わるのは单音節語幹の後に限って認定することにしたと述べている。

『ヒュ不規則活用の解説は、附録の、語幹末「ㅎ」が…の前でなくなるに対し、「ㅎ」が…の上で「줄어」活用される形式であり、「없어지다」ではなく「줄다」を用いて述べている。『우리말 큰사전』も同じで、…の前で「줄어서」語幹末を変えるものと解説している。さらに、「ㄹ」不規則活用の解説も語幹末「-ㄹ」が…の前で「줄어지는」形式としている。また、徐廷洙(1996)の「ㄹ」変則用言の解説は、…と結合するときにその“ㄹ”的“으”が「줄면서」「ㄹ」が付け加えられるである。「ハングル綴字法」第4章第二節第18項1~4、不規則‘ㄹ’、‘ㅅ’、‘ㅎ’と‘ㅌ’、‘ㄴ’の見出しも‘語幹末の～が‘줄어질’とき’とし、解説でも‘줄어지다’を用いて説明している¹⁰⁾。‘줄다’は‘弱まる、衰える、縮まる、縮約される、減少する’など、どのように解釈するとよいか、‘なくなる’‘ 없어짐’という言葉を用いる説明との違いは何か、変則用言が生じる過程を今後いっそう検討していくことで考えていかなければならない¹¹⁾。ところで、語幹末‘ㅎ’に語尾‘아/어、았/었’が続くときの活用、たとえば、‘발갛다/그렇다; 발개/그래、발겼다/그랬다’に触れているものはなかった。

3. 曰変則活用とㅎ変則活用の問題の検討

前章の解説に基づき、各変則用言が生じた原因を簡潔にまとめ、曰変則活用とㅎ変則活用の問題を検討する。

3.1. 変則用言の解説のまとめ

‘ㄷ、ㅌ、ㅅ、ㅎ’の各変則活用は母音の影響を受け、音響度が大きい音に変わる現象による。ㄷ変則活用は‘ㄹ’に変わり、ㅌ変則活用は‘ㅌ > ㅍ > ㅂ’又は脱落、ㅅ変則活用は‘-ㅅ ->-△ -> 脱落’の変化を経る。ㅎ変則活用は‘ㅎ’が弱化脱落し、ㄹ変則活用は別の形態素との結合により‘ㄹ’が脱落する。ㄹ变則活用は‘ㄹㅇ’での‘ㅇ’の消失により、‘ㄹㄹ’になり、ㆁ变則活用は母音連結規則により起こり、‘어’になる。ㆁ变則活用は異化作用によるものである。

ここで曰変則活用の変化の過程を改めて説明する。語幹末‘曰’に‘아、어’が結合すると母音調和規則に従い‘와、워’と活用していたが、それが二音節以上の語幹の場合には陽母音でも‘워’に活用するようになった。そして、実際の発音どおりに書くという現行の綴字法に従い、‘금다、긔다’を除き‘우’で書くことになった。

例 ょ금다: ょ + 아→고바 > 고방 > 고와

哟긔다: ょ + 어→구벼 > 구방 > 구워

가깝다: 가깝 + 아→가까바 > 가까방 > 가까와 > 가까워

ㅎ変則活用は‘ㄱ、ㄷ、ㅌ、ㅅ’以外の子音の後で‘ㅎ’が弱化し脱落するものであるが、母音

が続くと陰陽母音全て ‘- ㅂ、- ㅆ다’ に変わる理由を考察するため、古語に遡り語源を明らかにすることにする。そこで、色彩形容詞五語と指示詞四語の古語とその用例を『李朝語辞典』と『우리말 큰사전』と『금성판 국어대사전』で調べ、次に示す。辞典名は（李）、（우）、（금）と略号で記す。まず、（금）の活用形と二次語源を紹介する。〈 〉は活用形、[] は二次語源を示し、語幹の前に/を付す。

거렇다 〈거머니、거머오、거메〉 [/검 =+- 어 + 하다]

누렇다 〈누러니、누러오、누레〉 [/누령 = (</누르 =+- 어 + /하 =) +- 다]

발갛다 〈발가니、발가오、발개〉 [/밝 =+- 앙 - (- 아 + /하 =) +- 다]

펴렇다¹²⁾ 〈펴러니、펴러오、펴레〉 [펴령 = (</펴러 + /하 =) +- 다]

하얗다 〈하야니、하야오、하얘〉 [하야 (/혁 = (회다) +- 아) + 하다]

이렇다 〈이러니、이러오、이래〉 ‘이러하다’ の縮約語¹³⁾

그렇다 〈그러니、그러오、그래〉 ‘그러하다’ の縮約語

저렇다 〈저러니、저러오、저래〉 ‘저러하다’ の縮約語

어떻다 〈어떠니、어떠오、어때〉 [어떻 = (</어여 + /하 =) +- 다] ‘어여하다’ の縮約語

☞変則活用の古語の例

（李）を基準にして示すため、他の辞典に同じ例がない場合には辞典名を省略する。縮約形の標題語¹⁴⁾に付けた例には辞典名に‘縮’と付す。卷数や張数が異なるものは | の後に書き、表記の違いは [] に書く。声調符号は省略し、出典名は二回目以後一部を略して書く。

거며흐다 거며개 [캐] 흐고 [救急簡易方一95] (李) (우:縮) 거며흐야 아디 몬흘시 [南明集諺解下70] 終南山이 거며흐도다 [杜詩諺解重十三12] 누출 마조 보와서 거며호물 슬코 [同初二27] {全て (우) もあり。} || **누려흐다** 訓비치 マ독호 楼불八할피는 マ극미 雲霧 | 누려흐도다 [杜詩初十45] 누 누려흐다 [漢清文鑑156b | (우) 六 9] 누린 高과 [救簡一25] 누린 안개 四方에 マ독흐고 [内訓初刊二上49] {全て (우) もあり。} || **불가흐다** 푸라 불가흐샤미 [月印积譜二58] || **불경다** 오도 불거흐니를 하나 쪘그나 누로니 시비 [救簡六 8] (우) 감초 두 돈 반 얹간 불거케 구워 사흐로니와를 [同三79] (우) || **펴러흐다** 곧 蒼然히 펴러흐느니 [金剛經三家解二29] 헤마 楚人 뢔희 펴러호물 보리로다 [杜詩初八20] (李) (우) 기러기 펴련 하늘해 별오 [金剛五 8] 晉又 출_unix 어미 헌오 끄爇 荀草 | 펴러흐도다 [杜詩初八31] (우) 셔미 펴러흐도다 [杜詩初21 : 40] (금) **파라흐다** 晉 マ쉬 내왔는 玄우미 파라흐도다 [同初 6 : 52] (금) || **하야흐다** 하야肯 아니흘 디로다 [杜詩初二十五50] (李) (우 : 縮) 物이 하야 헤야 [同八53] (李) (우) 쪘기 하야호매 [金剛三11] (李) (우) 東 넉 수들게 구루미 나니 西へ 넉 수들기 하야흐고 [南明下19] (우) 사호는 싸행 뼈 하야 헤도다 [杜詩初16 : 73] (금)

이러흐다 얹간 널오문 이러커니와 字細히 널옳던댄 [蒙山和尚法語略錄諺解66] 一切…海雲을 내야 이리듯시 虚空에 マ독흐야 [月印十51] 功德도 이리흐곤 헤물며…말다鄙 修行호미 쓰녀 [同十七54] (李) (우) 靈知도 쓰 이리흐니 [牧牛子修心訣13] 엇데 이런 더러본 일 헤거뇨 [月印一44] 이럴시 声聞緣覺이 물뚫고디라 [同一37] 이리쳐 더러쳐 이리쳐 더러쳐 期約이잇가 아소 님하 헌덕녀것 期約이이가 [樂章歌詞重刊上 8] (우:縮) 王業艱難이 이리흐시니 [龍飛御天歌25章] (우)

(금) || **그려흐다** 理 그려흐고 [月印十七59] 沒간 그려커늘 [楞嚴經九76] (李) (우:縮) 넷 사르미 모을흘 점복호미 이려흐야 그려탔다 [太平廣記諺解一24] (李) (우:縮) 그런가 [同文類解下47] 엇던 견초로 그려뇨 [金剛五17] 物物이 다 그려며 [楞三105] 庶幾는 그려흐것고 브라노라 흐논 빤디라 [月印、釈譜序6] (우) 真實로 그려더녀 아니더녀 [月印九36中] (李) (우:縮) 벼슬이 그려흐닝이다 [太平1:7] (금) || **여려흐다** 至孝 | 여려흐실 씨 [龍飛92] 帝業憂勤이 여려흐시니 [同5] (李) (금) || **엇더흐다** 네 빤데 엇더뇨 [釈譜十九4] 罪와 福과 비록 靈호를 네게 엇더료 [南明上63] 담담한 모수를 혜와도덕 엇더흐뇨 [朴通事諺解初刊上1] 蓋世氣象이 엇더흐시니 [龍飛65] (금) 빗내요미 엇더흘고 [朴通初上50] (李) (우) 法이 엇던고 흐야 [内初一80] 엇더한디 뒤흐로들요 매 제 일흐며 뱃物에 제 모르거뇨 [月印13:32] (李) (우:縮) 엇더타 獸閣画像을 누고 몬져 흐리오 [青丘永言P.4]

用例数や種類が少なく、資料も15、16世紀の物が多いが、激音化以外にむ表記がない例は‘누런、그려며’などである。さて、‘- 흐다’は縮約形で、‘- 흐다’が基本形である。基本形‘이려흐다’で代表させると、이려흐 + 아/았→이려흐 + 여/였→이려흐여/였→이려해/했¹⁵⁾であると考えるが、李崇寧·安秉禧(1994) I. 第4章第5節第40項縮約語付1の解説を見ると、‘이렇다’に‘- 아/어、- 았/었’が結合する場合¹⁶⁾、*이렇어、*이렇었다と書かずに‘이려흐다’に‘- 아/어、- 았/었’が結合した‘이려해、이려했다’を縮まった形で‘이래、이랬다’と書かなければならぬと説明している。上記(금)の活用形‘거예、누례’など¹⁷⁾は、皆、母音調和規則に従つたものである。それを全て‘이려해→이래’のように‘- ㅐ’と表記するに到つた理由を明らかにすることが今後の課題である。現代語‘- 흐다’の形に到る変遷とその時期、表記や音韻変化¹⁸⁾の問題等々、様々な要素を検討していくことが解決の手掛かりにつながると考える。

臼変則活用についても、二音節以上の語幹が陽母音である単語を‘오／우’どちらで表記しているか確認するため、む変則活用と同じで方法で調べて示す。

곱다 고분 쓸 얻니노라 [釋譜六13] 고온 빤들 내야 [法華經諺解二111] 겨집종은 고와 [杜詩初二十二43] 고우닐 스쇠롭 널셔 [樂軌動動] || **돕다** 相온 도불씨니 [釋譜九34] (李) (우) 서르도은 後에사 [南明上65] 経倫을 도오니 [杜詩初二十二43] 너의 깃구를 돋노니 [釋譜十一9] || **돕다** 輔는 도불씨니 [釋譜一32] (금) || **ㄡ갑다** ㄡ가온 곳 [漢清264a] 近處 ㄡ가온 곳…路覺遠 ㄡ가오되 가기 먼 길 [同264b | 九24] (李) (우) || **반갑다** 반갑도 반가왜라 [青丘P.95] || **앗** 갑다 앗가오니라 [小学諺解五61] || **사오납다** 사오나온 [內訓初刊一36] 둉괴흐야 미기 사오나와 [救簡一49] 어리 오 사오나와 [法華一49] (우) (금) || **사오낳다** 모미나葩 [釋譜九7] (금) 사오나한 일 지스면 [月印一37] (우) || **아름답다** 美는 아름다불 씨니 [釋譜十三9] 아름다을 언 [類合下5] (李) (금) || **아름닿다** 美는 아름다불 씨니 [月印八9] (금) **싸다롭다** 싸다룬 정스를 만다라 [增補三略直解上35] || **가비狎다** 입시울 가비야한 소리 드외느니라 [訓民正音諺解] 一時에 가비야와 식느니 [圓覺經諺解上一之一115] 가비야오닌 羽族이 드외느니라 [楞八74] 느려오디 아니흐는 굳며기는 가비야오며 가비狎도다 [杜詩初十四8] (우) || **가비狎다** 가비야온 드틀이 [小学六58] 스스로 가비야이 흄이 [同104] || **가비狎다** 터력의서 가비여울 적도 이시며 [五倫行實圖二60] || **가비狎다** 겹고 가비여우니라 [恩重經諺解2]

15、16世紀資料には母音調和規則に従った‘오、온、와’が多く、18世紀後半の資料である『漢清文鑑』にも‘온’が見られる¹⁹⁾。‘오’が‘우’に変わった時期も明らかにし、変遷過程と共に、文字と、発音器官や容易な発音に変わることなどの説明に一二の実際例を加え、簡潔に解説する工夫をしていきたい。

4. 終わりに

変則活用の二つの問題を検討してきた。現代語を説明するに際しては、言語史の基本事項を理解していること、『訓民正音』を読み直し、現行の綴字法を確認することが大事であると改めて感じた。授業で古語を耳にする機会をと思い、視聴覚教材資料室の歴史物語のビデオ教材を利用したことがある。王室の人々が話すときの文末表現は現代語の文語体に当たり、その形が変わって行き、現代の丁寧表現になったと一言述べたが、言語の変遷を少しずつでも知る場と教材がふえたらと思う。言語の歴史を学んで行く中で今回の課題を解き、それらを授業に活かして行きたい。

参考文献

- 姜信汎（1987）『増補版 訓民正音 研究』、成均館大学校出版部。
- 高永根（1987）『標準 中世国語文法論』、搭出版社。
- 金亨奎（1983）『増補版 国語学概論』、一潮閣。
- 徐廷洙（1996）『修訂増補版 国語文法』、漢陽大学校出版院。
- 安秉禱（1978）『十五世紀 국語의 活用語幹에 対한 形態論的研究』、搭出版社。
- 安秉禱・李珖鎬（1990）『中世国語文法論』、学研社。
- 유두선（1993）한글 古典 特講、한글出版株式会社。
- 李基文（1978a）『十六世紀 国語의 研究』、搭出版社。
- （1978b）『国語史概説（改訂版）』、搭出版社。
- （1990）『国語音韻史研究』、搭出版社。
- （1998）『（新訂版）国語史概説』、太学社。
- 李崇寧（1981）『改訂増補版 中世国語文法』、乙酉文化社。
- 李崇寧・安秉禱（1994）『고친관 한글 맞춤법 강의』、新丘文化社。
- 崔範勳（1990）『韓国語発達史』、慶雲出版社。
- 韓榮均（1990）不規則活用『国語研究 어디까지 왔나』、서울大学校大学院国語研究会編、東亜出版社、P157-168。
- 金敏洙・高永根・任洪彬・李丞宰編（1991）『金星版 国語大辞典』、金星出版社。
- 劉昌惇（1964）『李朝語辞典』、延世大学校出版部。
- 한글 학회 편（1992）『우리말 큰사전』、語文閣。

注

- 1) 李崇寧（1981:53）[70] 参照。
- 2) 李崇寧・安秉禱（1994:81）‘ハングル綴字法’第4章第2節第18項3の解釈で、单音節である‘종다’は‘爭’の音がきちんと発音される規則用言であると述べている。

- 3) 李基文（1978：140）に記述されているが、李基文（1998）では削除された。
- 4) 李崇寧（1981：46-47）[58]に詳細な記述がある。
- 5) 安秉禧（1978：32-33）参照。
- 6) 李基文（1998：149）参照。
- 7) この後、記憶努力を軽減するため、語幹（더우～더우）を作り、「類推作用」を説明している。[93](A)の変化と共に、文字と発音の変化を理解させるうえでも参考になる記述である。
- 8) 文教部で審議、制定され、1989年3月から施行された。
- 9) 1933年10月に朝鮮語学会で制定された《한글 맞춤법（ハングル綴字法）統一案》のこと。
- 10) 「ㄹ」받침이 … 빨음되지 않고 줄어지게 된다。‘ㅅ’이 줄어지지 않는 용언이 있다。‘ㅌ’가 줄어지지 않는 다。‘ㅎ’소리가 줄어져など。
- 11) 金素雲（1976）は『精解韓日辞典』であるが、その附録で‘ハングル綴字法統一案’に依るとして‘韓国語綴字法’を日本語に翻訳している。その第4節変則用言を見ると‘縮まる’と表現している。
- 12) ‘꽈眬다’には[ㅇ꽈眬다]という二次語源の解説がある。‘ㅇ’は子母音交替の原語の前に付ける記号であるので‘꽈眬다’のみ示した。他の例も同様である。
- 13) 標題語‘이러하다’では、縮約語は‘이렇다’であると説明している。他の語も同様である。
- 14) (李)では‘거멓다, 누렇다’は標題語として載せていないが、‘가맣다, 노랗다’はある。また、‘이리흐다’以外は、縮約形ではない‘그러하다, 저러하다, 어떠하다’を現代語として載せている。(우)には基本形の標題語だけに例を載せているものがある。
- 15) 李崇寧・安秉禧（1994）I. 第4章第5節第34項付2、第40項縮約語付7参照。
- 16) この場合の活用の様相が特異であると述べている。また、李崇寧・安秉禧（1994）I. 第4章第2節第18項5で‘하다’の活用において語尾‘-아’が‘-여’に変わることを、他の用言には見られない特例であると述べている。
- 17) 上記(금)の二次語源分析では省略したが、陽母音‘가맣다, 노렇다, 꽝眬다’の活用は‘가매, 노래, 꽈래’で、陰母音‘별酹다, 허옇다’は‘별계, 허예’である。
- 18) 李崇寧（1981）[76][77]‘母音の衝突（Hiatus）’を回避する方法として、二母音間に他の子音を挟む、特にy[j]の挿入がよく行われると説明している。
 [76] (3) ㄻ (為) + 아→ㄻ + y + 아→ㄻ아 여희 (別) + 어→여희 + y + 어→여희여
 [77] (3) 혜 (計) + 어→혜 + y + 어→혜여 금희 (分別) + 아→금희 + y + 아→금희야
 また、[79]では、15世紀に‘아야>애야’のような現象が起こっており、これはa-ai>ai-iaのように発達するもので、홰예>화예とは反対の現象である、[80]では‘아햐>애해’のようにahia>aiahiaのような現象が表わされると説明している。
- 19) ‘脊다’は単音節であるが、用例を見ると‘오’と活用し、例文中の‘어렵다’は‘우’と活用している。脊다: 부텨 일겄즈오미 끝 쉬오니〔法華一223〕 어려우녀 쉬오녀〔圓覺序69〕 쉬울 이〔類上4〕